# 四季録

## 土

庭に植えていた山モモの木を伐った。その切り株を念入りに掘り起こした。根は縦横無尽に土を割り、摑み、樹の支えとなって伸びている。少しずつ掘っては土を剝がし、数十本の根を手鋸で切っていった。

僕は原野の開拓者や農民のように土を知るものではない。それでも土をおもう。

掘りながら昔読んだ本を思い出した。今も目に浮かぶが、像となってまざまざと映った一場面がある。

ヨーロッパの北の方だったか？　静まりかえった自然の中にある土葬の墓地。請け負った墓掘り人夫は、垂直に切り立った長方形の穴を黙々と掘る。男は1人、見事にやってのける。

おそらくは、この男の中には死者を葬るという意味すら消えている。ただ役割として美しい穴を掘る。願い、祈り、陶酔、何ものでもなく、土に向かうひたすらの行為。潔い仕事だと思った。立派な仕事だと思った。羨ましく、願わくば僕もそんな生きざまをと思った。

絵を選んだ自分はどうなのか。キャンバスという無限の地に鍬を入れ、掘り起こすことはできているだろうか。まやかしのない墓掘り人夫のように。

また登山者にも土との強い結び付きを感じる。一歩一歩踏み締める足の裏から伝わる土の存在。歩を進めるのは、人の根幹的な動作を呼び覚ます喜びに通じているのではないか。

子供のころはまだ舗装されてない所が多く、泥の匂いや手触りは日常の中に密接にあった。今の道路を歩いていると、無性にアスファルトを剝がしたくなる衝動に駆られることがある。人がいくら蓋をしようが、その下にはどこまでも土があるのだ。だが、人はぬかるみを避けてゆく。

友人の原田光さんが岩手県立美術館の館長に着任して2年、東日本大震災が襲った。その後ややあって手紙をもらった。「しばしば沿岸に行く。前の光景を取り戻すことはもうできないが、ここで何がはじまり、何がおこるか、人の姿が見える気がして、むしろ過去なんかではないものを取り戻せるのではないか」と書かれていた。

大変な中、原田さんは津波に流された沿岸にたたずむ度に、草が生えてくるのを見ていたのかもしれない。虚脱や焦燥だけではない奇妙な興奮をもって。

人の無力の下に土があり、新しい命を生む。その命を見て人もまた立ち上がる。

土はささやく。正しい穴を深く掘れと。無心に応える墓掘り人夫。力を込めれば鼓動は打ち、血は流れる。その横で、死者は土に帰るのをジッと待つ。

土は生けるものも死するものも抱擁し、また次の生をうむ準備を始める。人はぬかるみを避けてはいけないのだ。

（吉田　淳治・画家）


(C) 愛媛新聞社　無断転載、複製及び頒布は禁止します。